

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「移民の継承語とエスニックアイデンティティに関する社会言語学的研究」（2023 年度第 1 回・通算第 7 回研究会）

2023 年度第 1 回研究会（通算第 7 回目）／第 32 回東京移民言語フォーラム

日時：2023 年 5 月 28 日（日）10:00–16:45

場所：東京外国語大学本郷サテライト 8F／Zoom によるオンライン開催

主催：AA 研基幹研究「アジア・アフリカの言語動態の記述と記録：アジア・アフリカに生きる人々の言語・文化への深い理解を目指して」（DDDLing）

協賛：東京移民言語フォーラム

報告者：安達真弓（AA 研）

会の始めに、代表者である安達から「日本のタイフェスティバル、及び、オーストラリアのパキスタンコミュニティ関連イベントにおける言語景観調査について情報共有を行う」という第 7 回研究会の位置づけについての説明があった。その後、2 件の研究報告に続き、ワークショップと討論が行われた。以下に各報告の要旨と、討論の内容をまとめる。

1. 猿橋順子（青山学院大学）

「国フェスに流通する記号資源と空間形成—東京開催のタイフェスを事例にして」

発表者（猿橋）は、野外の公共空間で国名を掲げて開催されるフェスティバルを「国フェス」と定義づけ、実地調査に取り組んできた。本発表は、2023 年 5 月に代々木公園で 4 年ぶりに開催されたタイフェスティバルの調査報告である。初日は単独で言語景観調査と参与観察を、二日目は日本在住歴 25 年のタイ人女性と共に過ごし、モノ・コトの意味や思いを聞いた。コロナ禍中、オンラインに移行したことも影響し、対面再開されたフェスティバルはコンテンツや運営方式に大きな変化が見られた。他方で、コンテンツはタイから持ち込まれた新しいモノ・コトが多かったにもかかわらず、従来のフェスティバルをよく知る調査協力者は、より「日本人向け」になり「本物らしくない」と言及する場面が少なくなかった。国フェスに持ち込まれるモノ・コトは、相互に関連付けられて、その場にいる人にとっての意味が生成される。さまざまな人が集う国フェス研究の方法論と研究意義を参加者と活発に論じた。

2. 山下里香（AA 研共同研究員， 関東学院大学）

「“Who wants to see the City Hall in green and white?”—2023 年 3 月豪州調査の報告」

移民の言語およびエスニックアイデンティティの継承や再生産は、様々なマイクロ・マクロの環境に影響される。移民コミュニティのイベントにおける人々の実践や言説は、多様化する都市部において継承語の行方を考えるために重要である。本報告では、2020 年の科研獲得以降初めての海外調査となった豪州クイーンズランド州でのパキスタンコミュニティ関連イベントの分析の経過の一部を報告した。概して、個々のプログラム内容（実践）に関しては、日豪で多くの共通点が見られた一方で、日本で見られなかったプログラム内容とイベントの基盤となるディスコース（言説）からは、コミュニティの位置づけの相違が見られた。

コメンテーターに林貴哉氏（武庫川女子大学）を迎えたワークショップでは、山下里香氏（AA 研共同研究員， 関東学院大学）、及び、杉浦黎氏（AA 研共同研究員， 東京大学／日本学術振興会）からタイフェスティバル（先の発表にて猿橋氏が取り上げたものと同一のイベント）で行ったフィールドワークについての報告があった。本研究会には 14 名（うち代表者・所員・共同研究員 8 名）の参加があり、盛況のうちに行われた。

以上
（文責・安達真弓）